

2020年 外国人来阪者数  
650万人達成に向けての課題

大阪観光局

2013年来阪外国人宿泊者のうち97.9%がホテルに滞在しており(表3)、都市型観光の形となっているが、ビジネス客を含めた国内来阪者も増加しており、大阪府域内のホテル年間客室稼働率は79.6%と、高い数字になっている。時期によっては9割近い数字を示す場合もある状態である。

日本の旅行代理店との競争に加え、海外旅行代理店間(韓国・台湾・中国・香港・タイ・マレーシア等)の競争が激化しており、現在、各国の旅行代理店から『大阪はホテルが確保しにくい』という声が増えつつある。特に週末、桜のシーズン、紅葉シーズンは客室手配が大変困難になっている。また、USJのハリーポッターのコンテンツが新たにオープンすると、ますます国内外の旅行客のホテル需要が増えると思われる。

いったん、旅行代理店が『大阪はホテルが確保しにくい』という固定観念を持つと、旅行商品造成も宿泊抜きのもが増えていくため、2020年の外国人来阪者数650万人、延べ外国人宿泊者数900万人の目標達成のためには、プロモーション等の強化とともに、受入環境整備の一環として、ホテルの増加、特に大阪市内にホテルを増加させることが必要となってくる。

あわせて、650万人を海外から運ぶためのキャリアーについても、空路・海路のキャリアーの誘致増だけでなく、他地域の国際空港から陸路で来阪する旅行商品造成を増やすことも関係先と連携して推進する必要がある。

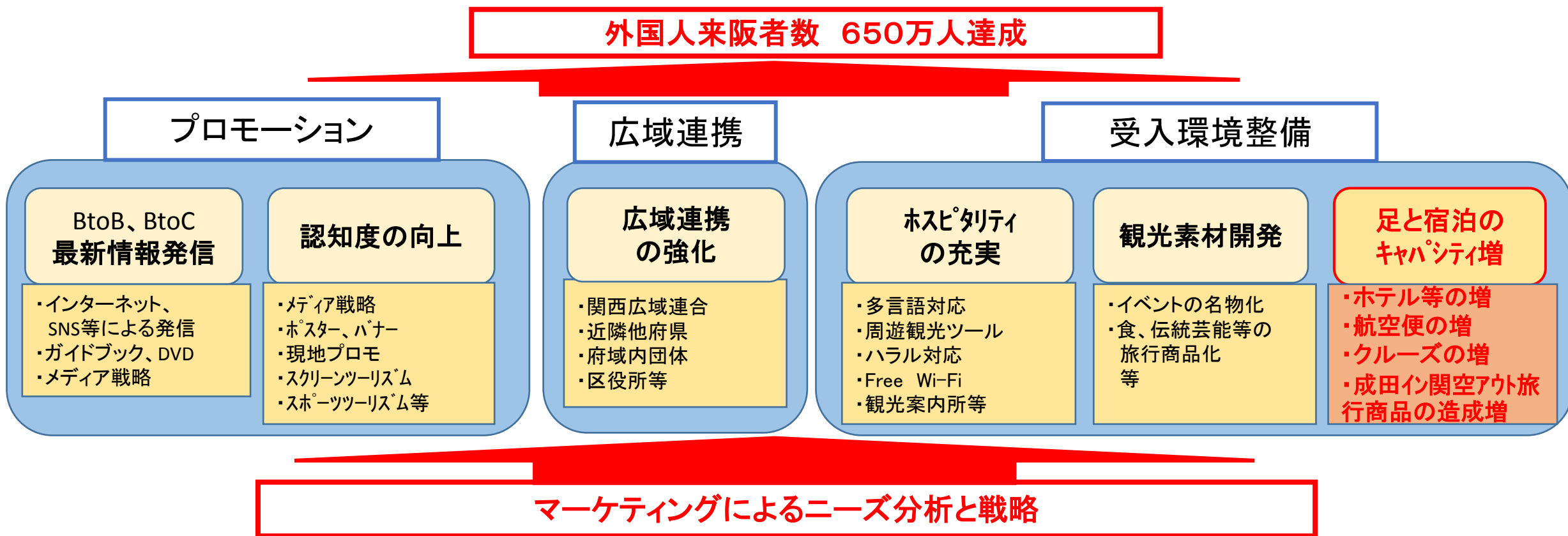


表1) 大阪府内ホテル客室数の推移(年度別・H20~24)

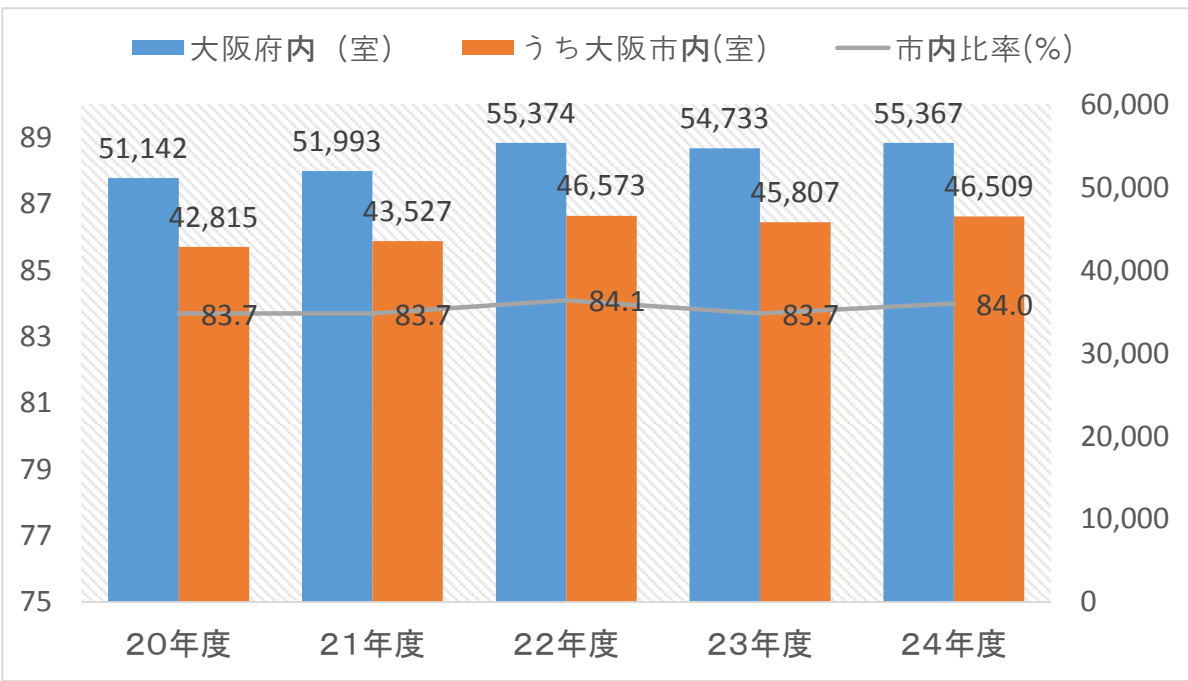


表1 参照:厚生労働省「衛生行政報告例」各年度資料

表2) 大阪府内実宿泊者数(年別・ホテルのみ)

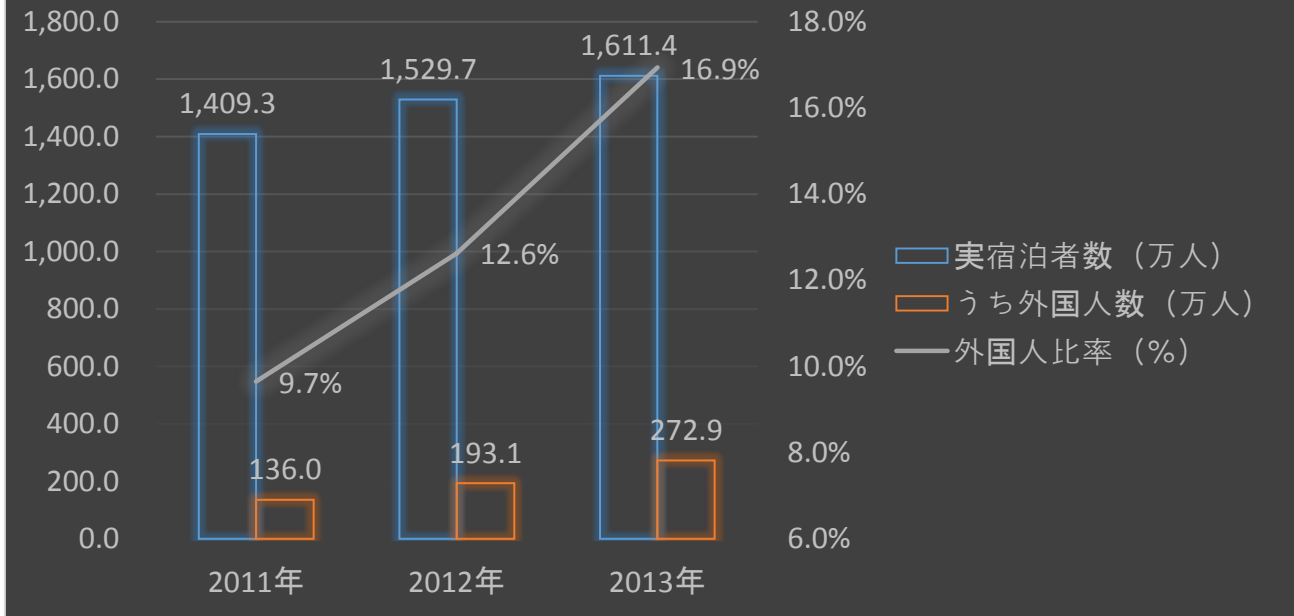


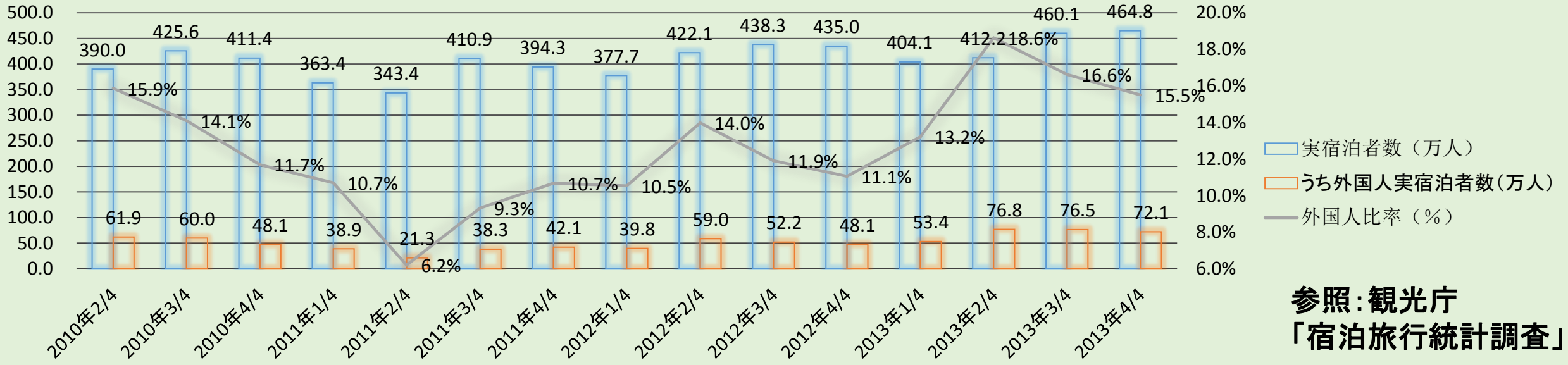
表2、表3 参照:観光庁「宿泊旅行統計調査」

ホテル関係の数値はリゾートホテル、シティホテル、ビジネスホテル項のみ抽出して算出。  
2013年数値は暫定値。表3のホテル客室数は厚生労働省「衛生行政報告例」24年度データ。

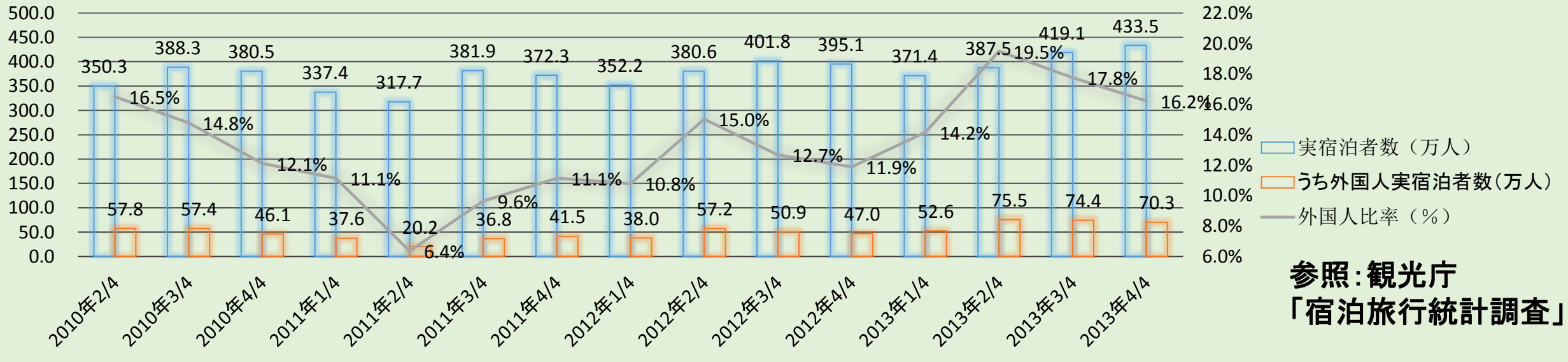
表3) 宿泊旅行統計データ(2013年・外国人実宿泊者数 上位5都道府県)

都道府県名	延べ宿泊者数 (万人) A	うち外国人延べ宿泊者数 (万人) B	C (B/A) (%)	実宿泊者数 (万人) D	うち外国人実宿泊者数 (万人) E	F (E/D) (%)	実宿泊者のうちホテル宿泊者数 (万人) G	外国人実宿泊者のうちホテル宿泊者数 (万人) H	I (G/H) (%)	J (H/E) (%)	ホテル客室稼働率 (%) K	ホテル数 (軒) L	ホテル客室数 (室) M	ホテル1軒あたり客室数 (室) N(M/L)
東京都	5148.3	998.4	19.4	3470.6	486.8	14.0	3197.2	466.4	14.6	95.8	82.5	684	95,878	140
大阪府	2409.1	430.9	17.9	1741.3	278.8	16.0	1611.4	272.9	16.9	97.9	79.6	359	55,367	154
北海道	3039.2	305.0	10.0	2317.6	231.7	10.0	1583.5	143.2	9.0	61.8	63.1	687	63,794	93
千葉県	1978.9	199.3	10.0	1500.8	161.4	10.8	1321.8	160.4	12.1	99.4	76.3	173	28,242	163
京都府	2062.9	265.7	12.9	1350.0	143.5	10.6	944.3	115.2	12.2	80.3	79.4	200	22,254	111

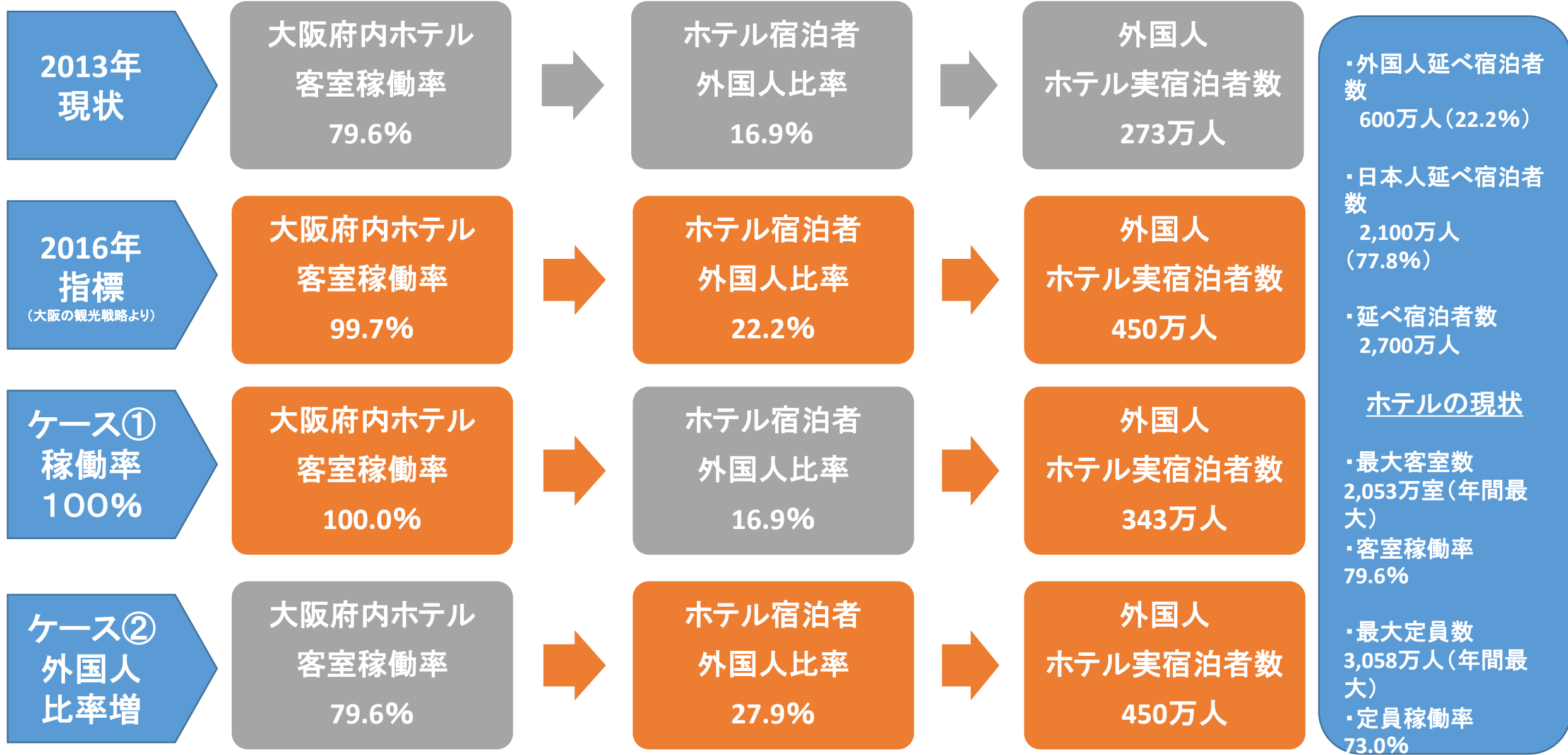
## 大阪府内 実宿泊者数(四半期別)



## 大阪府内 実宿泊者数(四半期別・ホテルのみ)

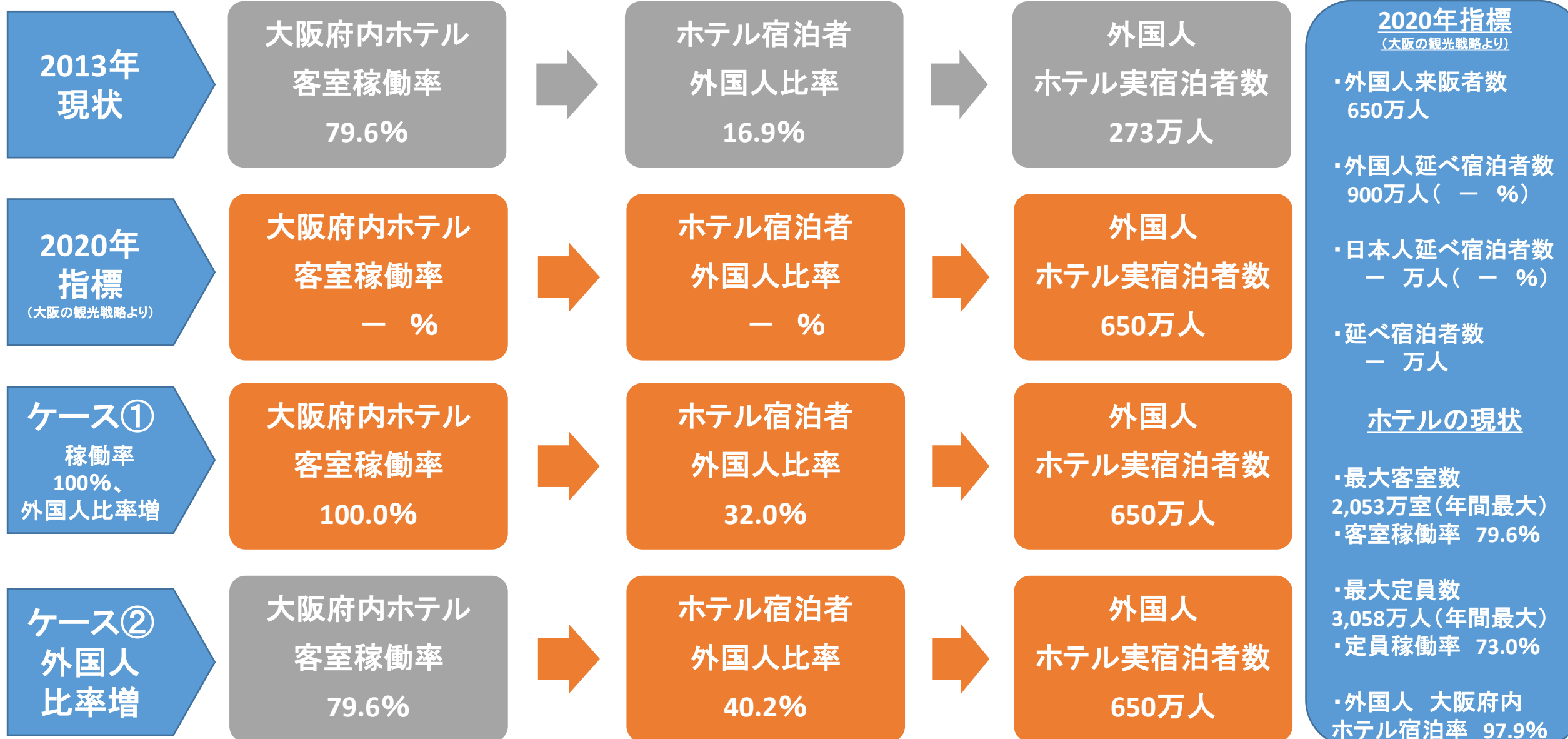


# 2016年の指標達成に向けて



宿泊者の収容が限界状態で、原状のままのホテルの客室数では外国人が大阪のホテルを予約しにくい状況がさらに増加する

# 2020年の指標達成に向けて



現在の客室数のままであれば国内外客の客室奪い合いがますます激しくなり、ホテルの客室の慢性不足状態が見込まれる

## 2020年 来阪外国人旅客数650万人の達成に向けて（達成に必要な航空便数の推計）

### ○前提条件 その①（2013年暦年の実績）

	項目	実績値	データソース
①	来阪外国人旅客数	約260万人*	JNTO発表資料・観光庁調査
②	関空の入国者数（外国人）	約232万人	法務省資料
③	関空の入国者数（日本人）	約343万人	法務省資料
④	関空の国際旅客便数	約3.5万便	関空会社発表資料
⑤	関空の航空便座席数	約956万席*	トラベルジャーナル統計資料

\*データを元にした推計値

### ○前提条件 その②（予測をするにあたっての条件）

- 来阪外国人の「到着時関空利用率」 = 90% <②÷①>
- 全入国者に対する外国人の割合 = 40% <②÷(②+③)>
- 1便あたりの座席数 = 約270席 <⑤÷④>
- 国際線の搭乗率 = 60% <(②+③)÷⑤>

• 1便あたりの  
外国人搭乗者=約65人

### ○上記条件をもとにした試算

- 2013年に対して390万人の上乗せが必要で、そのうち関空到着便利用者は351万人。
- 1便あたりの外国人搭乗者数から、年間5.4万便=1日あたり148便の上乗せ（現状の2.5倍）が必要。

処理能力を考慮しても現状の2倍以上の便数の就航は現実的でない。  
⇒ 今後の変動要因などを加味して前提条件を再設定。



○今後の変動要素

要素	プラス要因	マイナス要因
LCCの台頭	低価格により、訪日旅行者層の すそ野が拡大 →外国人比率、搭乗率が向上	小型機が多く、1便当たりの提供座 席数が減少
リピーターの増加	訪日旅行需要がさらに拡大し、 既存の航空便の機材が大型化 →提供座席数が増加	大阪以外の「地方」への需要が高 まり、大阪での滞在日数が減少
地方空港国際線の充実 (他地域との連携)	周辺府県との連携などにより、 鉄道・バス利用での大阪訪問が 増加 →到着時間空利用率の低下	同上

これらを元に、前頁の「前提条件 その②」を修正

- 来阪外国人の「到着時間空利用率」 = 75% (-15%)
- 全入国者に対する外国人の割合 = 50% (+10%)
- 1便当たりの座席数 = 約270席 (変化なし)
- 国際線の搭乗率 = 70% (+10%)

• 1便あたりの  
外国人搭乗者=約95人

○上記条件をもとにした試算

- 2013年に対して390万人の上乗せが必要で、そのうち関空到着便利用者は293万人。
- 1便当たりの外国人搭乗者数から、年間3.1万便=1日あたり84便の上乗せ(現状の1.9倍)が必要。

関空の便数を増やす努力をする一方で、並行してクルーズ誘致や「成田in関空out」等の他地域の国際空港から大阪入りする旅行商品造成に努めることで来阪外国人の『足』を確保することが必要である